

『クラブステップバス』

ホントは暗くて

人付き合いはイヤなのに

ハデな衣装で踊りまくるアナタと

しゃべりたいけど

しゃべって遊んでたいけど

言葉がつかえ苦しくなったアナタが

とにもかくにも巡り巡らせる旅

一夜かぎりの煌めくようなカーニヴァル

床を叩こう ステップはこうさ

One two three four five

触れて触れられ 大型バスはカーニヴァル

椅子を倒して乾杯しましょ

One two three four five

あまりに優しく

いつも顔色にして

傷つくことを怖がりすぎるアナタと

正直すぎて

ロコツ・セキララばかりで

周りの人を怒らせてしまうアナタが

自由気ままに見つめ合えるような旅

一夜かぎりの煌めくようなカーニヴァル
窓を広げて 音を響かせ

One two three four five

揺らし揺らされ 大型バスはカーニヴァル

通りすがりの車にエシヤクを

One two three four five

未来のためにと

予測・予約を重ねて

なんだか動きづらくなったアナタと

今この時々

シンカンだけに生きていて

それで失敗してしまいがちなアナタが

調和し合って飲みやすくなるような旅

一夜かぎりの煌めくようなカーニヴァル

好きな食べ物 好きな分だけ

One two three four five

飛ばし飛ばされ 大型バスはカーニヴァル

嫌いなものは隅に寄せてけ

One two three four five

クラブステップバス

ストリップ・ショウ

踊り候え／酔いどれ天使

SCRAP／HEROINE

フランケン／SPFLASH

赤と黒／月夜と盗賊

メトロノーム

『ストリップ・シヨウ』

青い光が窓辺を揺らすとき

甘い香りが館を包み込む

吐息のようなピアノが鳴ったあと

舞台の幕が静かに開いていく

みなはワインのボトルを傾けて

グラス越しから彼女の脚を見る

どうせ夜中は哀しく明けるから

仮面の下でひとりの恋をする

好きだった人のこと教えて

心の中で小さく打ち明けて

忘れられない夜中をもう一度

思い出してよ

何度も、何度でも

ピンク色した氷が溶けるたび

ヴァニラ・アイスもとろけて垂れてくる

もしも誰かがその手を伸ばしたら

素敵な夜はたちまち崩れてく

裸足の脚でゆっくりあゆみ寄り

誘うみたいに震わせて伸ばして

ネイルの色は口紅と同じで

靴がこすれる音だけ響いてる

好きだった人のこと教えて

心の中で小さく打ち明けて

忘れられない夜中をもう一度

思い出してよ

何度も、何度でも

届かないなら遠くでキスをして

さわれないなら指先で伝えて

それでまだまだ足りないと言っなら

ひとりの部屋でふたりの夢を見て

好きだった人のこと教えて

心の中で小さく打ち明けて

忘れられない夜中をもう一度

思い出してよ

何度も、何度でも

好きだった人はいま何処なの

わからないなら静かにうなずいて

忘れられない夜中をもう一度

忘れられない記憶をもう一度

『踊り候え』

景色を描いても最後は

自分の顔になるのなら

いっそ絵筆をへし折り

踊り候え

向かいのホテルの広間は

ワインとテキーラの宴

俺はそれを眺めつつ

踊り候え

きつと今夜も寝むれやしない夜だから

ひどいリズムで つたない手つきで

踊ってしまえばいいだろう

もしも誰かが笑ってくれるというなら

割れたガラスを床に散りばめて

踊ってしまえばいいだろう

寝具もシートも乱れて

足の踏み場もないくらい

夜を通して はしゃいで

踊り候え

そんな夢から醒めたら

哀しくなってしまうから

ひとりカーテンをしめて

踊り候え

きつと今夜もいろいろ悩むだろうから
足をもつらせ 季節を忘れて
踊ってしまえばいいだろう

もしもひとりも見向きもしないというなら
踊りも何もかもを投げ出し
笑ってしまえばいいだろう

ミラーボールは自腹で買いました
甘い香りは花から炊きました
何をしようか 笑い泣こうか
それでいいでしょうか？

きつと今夜も寝むれやしない夜だから
ひどいリズムで つたない手つきで
踊ってしまえばいいだろう

もしも誰かが笑ってくれるというなら
割れたガラスを床に敷き詰め
踊ってしまえばいいだろう

きつと今夜もいろいろ悩むだろうから
足をもつらせ 季節を忘れて
踊ってしまえばいいだろう

もしもひとりも見向きもしないというなら
踊りも何もかもを投げ出し
笑ってしまえばいいだろう

『酔いどれ天使』

おれが何本何瓶何缶 飲んで潰れても
いなくなったアンタのことを忘れられない
酩酊ココロおどらせ街を歩いてても
天使になんかなれないや
今日も千鳥足

やっぱり記憶は曖昧でアイマイあいまいで
たぶん昨日の酒が強すぎた
だのに事実は鮮明でセンメイせんめいで
あーあ ビールでも買いに行こう

まだアンタがいれば違うよな
いなくなつてからは増し増しだ
後悔↓泥酔↓改心↓再犯↓後悔↓泥酔で
もう流れから抜け出せない

おれが何本何瓶何缶 飲んで潰れても
いなくなったアンタのことを忘れられない
酩酊 ココロおどらせ街を歩いてても
天使になんかなれないや
今日も千鳥足

謝罪の気持ちはもちろんだモチロン勿論だ
悪いのは寄り道させる一升瓶
おうよ 気持ちは真剣でシンケンしんけんで
あーあ 舌ペロがもつれてる

ひどい言葉も仕打ちもしてきたな

アンタが逃げるのも当然だ
後悔↓泥酔↓改心↓再犯↓後悔↓泥酔で
もう何してるかわからない

おれが何十何百何千 詫びてすがつても
酔いどれのおれのことなんか許さないだろ
どうせダメだと思つて酒を酌みながら
昨日とまったくおんなじな
汚れた朝明け

わかつてるんだ 酒なんざ
解決にも薬にもならない
わかつてるんだ あと一杯
それだけ飲ませてくれよ

おれが何本何瓶何缶 飲んで潰れても
いなくなったアンタのことを忘れられない
酩酊ココロおどらせ街を歩いてても
天使になんかなれないや
今日も千鳥足

そして何本何瓶何缶 飲んでダメになり
いなくなったアンタのことも忘れてしまうよ

『SCRAP』

今夜もTOKIOはBLACK HOLE
ぼっかり虫食い DIRTY・TOWN
なんかわからんけど足りてない
明り眩しすぎて寝むれない

COCA・COLAの缶を蹴つ飛ばす
傍らを抜き去った夜行バス
行先もわからない深夜二時
だらりダベリながら歩く路地

“ WE ARE JUST SCRAP ”
ガラクタのままで叩けクラブ
へたくそなRAP引っ提げて
ラフな服着て踊りゃ万事解決

“ WE ARE JUST SCRAP ”
未完成くらいがちょうどいい
きつとこれから騒がしくなる
ラクなままその手を拝借

やっぱり社会はBIG GAP
擦り切れて穴開いたままのCAP
かぶって夜の街へ繰り出す
あちこちからヘッドロが這い出す

べつに考えていないわけじゃない
どうしても明日は迫ってる
やるときが来たならばやらなきゃ

いびきをかけるほど腐っちゃない

“ WE ARE JUST SCRAP ”
異端異質でいいよ、踊っとけ
へたくそなRAP引っ提げて
くずな脳みそ震わせ飛んじゃえ

“ WE ARE JUST SCRAP ”
奢ることもたまには必要さ
きつとこれから楽しくなる
ハイになれば痛みも快樂

今夜もTOKIOはBLACK HOLE
ぼっかり虫食い DIRTY・TOWN
一文無しでもやれることをやろう
どうせ人生なんて絶えず浮浪

路地裏の狭いフロウからでも
何か言える言葉があるだろう？
俺たちはみんな馬鹿な野郎
馬鹿の種も植えりや木になるだろう

“ WE ARE JUST SCRAP ”
ガラクタのままで叩けクラブ
へたくそなRAP引っ提げて
ラフな服着て踊りゃ万事解決

“ WE ARE JUST SCRAP ”
未完成くらいがちょうどいい
きつとこれから騒がしくなる

ラクなままその手を拝借

『HEROINE』

洗いたてのシャンプーで
魅力的になったあなた
ちよつとつまんだだけで
クラクラするよ、すぐに

ジラされてアセラされて
ココロも熱くなったなら
ちよつと吸いこんただけで
倒れちゃうかも

ボクなんかの脳内さらって
フシギな夢見せて
つかのまの満足でかまわないの
旅に出よう

BABY BABY BABY
もつと素敵な日々を
GOING GOING GOING
もつと危ない時を

あなたの友達に向け
ひそかに電話をかけて
めったに会えないあなた
連れてきてもらおう、すぐに

二人はたぶんグルで
ボクを惑わせてくる

金が尽きたとバレたなら
きつとひよいと捨てられる

ボクなんかの人生乱して
見えないモノ見せて
顔を見合わずたびに好きになるよ
おかしくなる

BABY BABY BABY
もつと激しい夢を
GOING GOING GOING
何も見せない明日を

あなたでずつとずつと痛いのに
好きでいるのかな
あなたでずつとずつと苦しいのに
抱きしめてしまうのかな

ボクなんかの脳内さらって
フシギな夢見せて
つかのまの満足でかまわないの
旅に出よう

BABY BABY BABY
もつと素敵な日々を
GOING GOING GOING
もつと危ない時を

『フランケン』

暗い場所から出てきたみたいに
顔をまっすぐ見ていられない
もともと細めのぼくの眼を
もつと細めてしまうくらい

ぼくはぼくで悩みが多いし
あなたはなんだか傷だらけだし
もつと素直になるべきだよ
本音を言うのも悪くはないヨ

継ぎ接ぎの腕でハグして
ぶきつちよな愛を言わせて
ぼくたちは誰しもが
欠陥だらけのMONSTER

がらくたで出来た記憶に
あなたの笑顔があったなら
すこしだけ「ヤサシサ」の
意味がなんとなくわかるかも

気遣うつもりで気遣われてるね
ぼくもすっかり手助けしたい
だってさ、もともと機械だし
いちおうコンピュータだからさ

「もしもぼくが暴れたりして
あなたのココロに傷をつけたら？」
あなたはぼくの頭を撫でて

「そんなに気にしちや息苦しいよ」

見た目は醜い姿
気にせずキスするあなた
脈拍が早いのは
あなたがヤサシイからだ

あなたと視線が合うと
震えてくるんだ、カラダ
そのせいで照れてるの
いつもなんとなくバレちゃうよ

継ぎ接ぎの腕でハグして
ぶきつちよな愛を言わせて
ぼくたちは誰しもが
欠陥だらけのMONSTER

ロボロボの腕でハグして
壊れかけの眼で見つめよう
最後までキザなコト言ってもいいでしょ？
「愛してる」

『SPLASH』

ゆつくりドレスを脱がせたあとで
小さな唇 食みあつたり
小さなあぶくを浮かべたり
あなたは吐息混じりで
ひと晩だけの「好き」を口にしてる

あなたは朝には帰ってしまい
青いテトラと恋したり
真っ赤なヴァルブと笑ったり
それでかなしくなったら
僕の小さな部屋に戻ってくるのさ

ぱつと立って消えていく飛沫のように
ネオンカラーの夜が更けていくから
もっと泣いて すさみそうな心を見せて
消えかかった口紅のままでもいいから

たまにはワインも飲まないままで
知らない港を揺らめいたり
体を重ねて飛び込んだり
滴る瞳の先では
いったい誰の顔を思ってるの

あなたとしばらく逢えずに僕は
小さな魚を飼ってみたり
餌を忘れて死なせたり
知らない男の顔を
描いてみるたび自分が嫌いになる

ぱつと立って消えていく飛沫を もっと
抱きしめたい、そんな願いがあつて
もっと呼んで 掠れそうな声で呼びかけて
違う男の名前のままでいいから

さつと逢って帰るのがあなたの恋なら
さみしさを埋められる夜はいつなの
ぱつと立って消えていく飛沫のように
ネオンカラーの夜が更けていくから
もっと泣いて すさみそうな心を見せて
消えかかった口紅のままでもいいから

『赤と黒』

赤いレイディに黒いジェントルマンと
染まり切れないオレンジの市民も
誰もかれもが一年に一度くらいは
ハメもボタンも外して摩天楼

風の悪戯 イカサマ瞬く間
世にもキミヨーな七階の血しづき
恋の行方もギャンブルもナイフの主も
星とコンチネンタルしか知らない

カジノの夜は赤と黒の夢模様
賭けてみたり それを眺めたり
それはまるで彗星の如きもの
カルモチンとゾピクロンの色の眠りで
勝ちも負けも 秘密のカバラも
すべてマボロシ、あこがれ

今日はメイクもリップも引き締めて
清楚なフリで妖艶に招いて
アンナことからカレーニナことも夜が
黒を着込んですべては闇の中

時の抜け駆け 目覚めは夜明け前
朝のビュツフェは洋食も中華も
なのにそのうち逃げ出す人がいるというのは
金かセンチメンタルなコトのせい

カジノの夜は赤と黒の走馬灯
酔ってみたり 罌を任掛けたり
それはまるで劇薬の如きもの

カメレオンとナポレオンのカプセル剤で
うっとり溶けて浸み込む世界へ
降りていこう、笑って

瞳の奥は白と黒のファンタジー
海の上にビルを浮かべたり
それはまるで戯曲の如きもの

カジノの夜は赤と黒の夢模様
賭けてみたり それを眺めたり
それはまるで彗星の如きもの
カルモチンとゾピクロンの色の眠りで
勝ちも負けも 秘密のカバラも
すべてマボロシ、あこがれ

『月夜と盗賊』

長くて冷たいあらしのあとで
細かな雨が降りました
ラクダの上の月夜の下で
指を絡め合わせました

きのう盗んだ絵画の色で
王女の肌を思い出し
そうして毎晩過ごしたうちに
砂塵で絵の具が褪せました

すべては夜の果ての果て
砂は流れて飛ばされて
何もかもが昔のはなし
語り伝える者もなし

沙漠の廓の王女は毎夜
名前も知らないキスをして
夜が薄れて明るくなると
キスの相手を忘れます

何も知らない盗賊は夜
王女に手紙を書きました
「もうじき街に帰ってきます」
「素敵な月夜を携えて」

すべては夜の果ての果て
闇は朝陽に混ぜられて
何もかもが昔のはなし

語り伝える星もなし

泉の中に罌を仕掛けて
水面の月をかけました
灯りの消えた夜空の下を
ラクダは街へと向かいます

街の門より数里も近く
誰かが捨てた新聞で
国の王女が結ばれて
祭があったと知りました

すべては夜の果ての果て
砂は流れて飛ばされて
何もかもが昔のはなし
語り伝える者もなし

『メトロノオム』

誰もかも寝むっているよ
さみしさを毛布に包みながら
じゃれあった今日はもう終わり
素敵な夢を

天井を見てしまったら
たぶん僕は寝むれなくなるだろう
枕を胸に抱きしめてから
まぶたを閉じる

知らないでいるうちに
傷つけあった僕たちも
いつかきれいになるからさ
おやすみなさい

さよならも言わないままで
手も振らず手紙も書かないで
いなくなった僕を忘れてよ
むかしのはなし

誰もかも寝むったあとで
口笛を小さく吹いてみる
あれ、この気持ちは何だろう
口笛吹きながら

知らないでいるうちに
ひっかきあった僕たちは
いつか笑い合えるのかなあ

おやすみなさい

きつと誰かが言うんだよ
「思い出はぜんぶ綺麗だよ」
きつと誰かが言うんだよ
屋上遊園地とかで

知らないでいるうちに
傷つけあった僕たちも
いつかきれいになるからさ
おやすみなさい